

## 「ジヨウ」の由来

匠 瑳 探 訪

189

下富谷(中央地区)を「ジヨウ(城)」と呼ぶことを耳にしたことがあるかも知れません。今回はその起こりを紹介します。1591(天正19)年2月に下総国で検地が始まり、慶長年間(1596〜1615年)まで継続して行われ、現在の字にあたる近世の村が成立しました。この時市域では、従来から使われてきた地

名をそのまま村名にしたところがほとんどでした。しかし、新たに村名が付けられたものもありました。下富谷村はその一つで、富谷村の南に位置したため付けられた村名で、それ以前は「ジヨウ」と呼ばれていたようです。

市内の地形は、国道126号線やJR総武本線をほぼ境として北部の台地と南部の低地からなり、

鈴木姓があることから、荻野(平和地区)の熊野神社などと同様に荘園管理の人たちが住んで集落ができたと考えられます。また、白山神社もまつられ、これは木積(豊栄地区)の白山神社から分霊(祭神の霊を分けて、他の神社にまつること)したものでしょう。昨年秋、匠瑳城郭保存活用会の会員らと集落の人の案内で下富谷城を調査しました。集落北側の用水路と考えられたものが、外からの侵入に備え人工的に掘られたもので、集落全体を囲むようにあったことが分かりました。

低地には海岸線に平行して細長く伸びる砂が堆積してできた砂堆列なだれに集落が形成されました。

市内南部地域が平安から鎌倉時代にかけて紀州・熊野三山神社(現在の和歌山県に所在)の荘園「匠瑳南条庄」でした。

1480年代と1550年ごろ二度にわたり房総・里見氏、正木氏の下総(東総地域)への侵攻があり、八日市場城などが壊滅しました。それに備えたことが「ジヨウ」の由来となったのでしょう。

(市文化財審議会委員・

依知川雅一)

問 秘書課広報広聴班



下富谷の堀跡

下富谷集落のほぼ中央に熊野神社がまつられ